慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イタリヤにおける社会民主主義とファシスト運動 : W. Hilton-young; The Italian left, a short history of political socialism in Italy, 1949.によせる
Sub Title	Social democracy and fascist movement in Italy
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.3 (1955. 3) ,p.237(53)- 246(62)
JaLC DOI	10.14991/001.19550301-0053
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550301-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Cive と略す）

③ De Cive, Chap. 13. p. 176.
④ Leviathan, Chap. 24. p. 233.
⑤ ibid., Chap. 24. pp. 238—239.
⑥ ibid., Chap. 10. p. 76.（水田洋譯「リヴァイアサン」(1)岩波文庫版一四七—八頁）
⑦⑧ ibid., Chap.24. p. 233.
⑨ De Cive. Chap. IV. 15. p. 58.
⑩ Leviathan Chap. 30. pp. 333—334.
⑪ ibid. chap. 24. p. 237.

附　言

以上、ホッブズの經濟論に關して彼の著作を繙いて、忠實に展望して來たが、その論旨甚だ徹底せず、平面的敍述に終った。續稿に於てホッブズの經濟思想と彼の自然法論との關係を特に彼の『自然狀態論』との關係の下に展開して行こうと思う。其處では本稿でいささか觸れた如く、彼の『自然狀態』は當時の市民社會を出發點としているが、それを契機として自然法觀を通じてその經濟論の意味を把握して行きたいと思ふ。出來うれば彼の著作 "Behemoth, the history of the civil War" との關係に於て見て行く豫定である。

其處では、ホッブズ理論の性格の本質を解明し、あわせて、イギリス重商主義に於ける彼の社會哲學のもつ意味を裏附け、ペティー、ロックに於ける經濟と政治との關聯の研究への手懸りとしたい。（未完）

資　料

イタリヤにおける社會民主主義とファシスト運動

——W. Hilton-young; The Italian left, a short history of political socialism in Italy, 1949. によせる。

飯田　鼎

一、はしがき
二、萠芽期のイタリヤ社會主義運動
三、イタリヤ社會黨の建設と發展
四、戰爭、革命そしてファシズム
五、地下組織と抵抗運動

一

今日ようやく新しいファシズムの問題が、われわれの重大關心事となろうとしている。わずか十年前ファシズムのためにあれほどひどいめにあつたわれわれが、二度とあのようなあやまちをくりかえしたくないことは云うまでもないが、しかしそれにもかかわらず毎日の新聞やラジオをきいていると、新しいファシズムというものが、それとなく身にひしひしとせまつて來るのを感ずる。いわゆるファシズムの正體が何であるかについてはすでに多くの書物が書かれ、正しい定義も下されてはいるが、われわれの目前にそれとなくせまつて來る新しいファシズムはそのような古典的なファシズムの定義をもつてしては、もはや說明しつくされないほどのものである。あたかも結核菌が藥に對して抵抗性をそなえて再び侵蝕をはじめるのと同じように、新しいファシズムは手をかえ品をかえ、あらゆる粉飾をこらして民主主義をうちたおそうとする。新しいファシズムの特徵は、みずから民主主義を口にしながら、民主主義を破滅させようとするもつとも惡質な、もつともいんけんなものであつて、彼等のえせ民主主義こそ新しいファシズムそのものにほかならない。

だがこの新しいファシズムが、現象的にはどんなに古典的なファシズムとちがつているように見えようとも、結局においてその本質は同じである。ただそのやり口がより巧妙になつたにすぎないからである。從つてわれわれがよりよく新しいファシズムの本質をつきとめるためには、一九二、三〇年代におけるファシズムがどのようにして發生したか、その歷史的な根據をたずねることはきわめて重要であるといわなければならない。われわれが普通にファシズムと云つた場合まず想い出されるのはドイツのナチズムであり、ヒットラーのやり方はそれほどわれわれの頭に印象づけられているのであるが、ヒットラーもその「わが闘爭」のなかで告白しているように、彼自身がファシス

トとなつたのは、實はイタリヤのファシスト運動から學んだのであり、ムッソリーニのやり口から多くの教訓をみちびき出した結果であつたからである。

ムッソリーニはどのようにして政權を奪取するに至つたか。その露骨で殘虐な手段こそ實は今日のわれわれが最も知らなければならぬところであろう。それはなぜか。第一次世界大戰からムッソリーニが政權を掌握するまでのわずか七、八年の間にイタリヤにはファシズムのための道をひらき、そのための準備をととのえた幾人かの政治家がいたことは注意されなければならない。たとえばわが國の吉田茂のような半ファシスト的人物もしくは公然とファシズムへの道をひらいていた幾人かの指導者たちが、イタリヤにもいたという事實は、ヤミの再軍備と汚職とそして憲法を無視するというまことにファシズム的行爲に苦しむわれわれにとつて何物かを暗示しないであろうか。わたくしがイタリヤにおけるファシスト運動の歷史にとくに關心をいだくのは以上の理由によるのである。

その前に「イタリヤの左翼――イタリヤにおける社會主義政黨の歷史」と題する本書に、私の批判をのべさせていただくならば、この書の第一の缺點はイタリヤ資本主義の發展についてその說明がきわめて不充分であることであろう。つぎに私の大きな不滿は、一九二五年以後ファシスト政權のはげしい彈壓の網をくぐつて勇敢に組織的な地下活動を行つたイタリヤ共產黨の功績を高く評價していないことである。しかしそれにもかかわらず本書は學問的に水準の高いものであることは否定しえない。とくに參考文獻はイタリヤの原典からなり、それをたんねんに讀みこなした苦心のあとが充分うかがわれるのであつて、しかもイタリヤ社會主義運動史の山とも云うべき一九一四年から一九二五年ムッソリーニの政權奪取までの十數年の間の記述に相當のページをついやしていることである。そこでわたくしは、この書を通じてイタリヤ社會主義運動とファシズムとの關係を歷史的に追求してみたいと思う。

二

ジムィホフはその著「國際勞働運動史」のなかでつぎのように云つている。「イタリヤはヨーロッパ資本主義諸國のなかの一つである。その特徴は資本主義の發展の速度が非常にゆるやかで、ドイツ、フランス、イギリスおよびそのほか多くのヨーロッパ諸國におくれている點である。經濟の上ではこの國は全く弱々しい國である。この國はほとんど石炭、鐵そのほかの主要な工業原料をもつていない。第一次世界戰爭と第二次世界戰爭の間に、イタリヤは水力發電と兵器工業の分野では非常に發展したけれども、現在のところ依然として農業生產を主とする國である。全人口の五六％は農業生產と關係をもつている。農業はおくれた技術や封建的な、また場合によつては封建社會以前のものでさえある農奴的な搾取制度を基礎にしている(1)」と。しかしイタリヤ資本主義のこれらの特徴は、實はすべての後進諸國についても多かれ少なかれ見出されるのであつて、わが日本もその例外ではない。

このような資本主義的な立ちおくれと封建的な生產樣式の殘存が、近代的意識の成長をはばみ、やがてはファシズム勢力の增大をもたらしたのであつて、ファシズムの精神的な基盤となるものが、プチ・ブル的な階級意識であるとともに、それよりはむしろ近代以前の封建的な意識があずかつて力あつたことは、イタリヤにおける社會主義運動の歷史が如實に證明している。イタリヤでは現在、社會黨と共產黨が、いわゆる共同戰線をはつて最大の野黨となつて敢鬪しているが、しかし七十年にわたるイタリヤ社會主義運動をかえりみるとき、あらゆる失敗と錯誤によつて彩られていることを知ることができる。

さて一八七〇年代から一八九二年のイタリヤ社會黨の建設までの約二十年間は、イタリヤ社會主義運動にとつていわば啓蒙と喧傳の時代であつた。多くの小王國に分裂し、一八七〇年代になつてようやくその封建的な眠りからさめたイタリヤ王國は、まず何よりも近代國家としての體裁をととのえなければならなかつたのであつて、カヴールやマジニーそしてガリバルジーなどの運動が、民族的な獨立運動としてあらわれたのはきわめて自然であつた。こうして英國の議會政治とフランスの官僚制度の混血兒として生れたこの近代國家も、やがて產業革命の過程を終えると、ここに近代的なプロレタリヤートの萌芽が、きわめて徐々にではあつたが、成長しつつあつたのだ。しかしこの當時の運動は農民一揆的色彩がきわめて強く、事實またこの時代の革命的運動と云えば農民を主體としたものが多く、この事實によつてもイタリヤ資本主義の立ちおくれということがはつきり理解することができよう。そしてのちにのべる一八九四年のシシリー島の農民の暴動のごときも、その背後にあつてこれを動かしたものは社會主義者であるよりは、反封建主義を旗じるしとする自由主義的な改革主義者であつた。

さて一八八〇年代になるとマルクス主義の思想が次第に紹介されはじめ、その當時の最も有能な指導者の一人、カルロ・カフィエロは、資本論をイタリヤ語に譯して出版したほどであつたが、しかしその當時のイタリヤ社會主義運動に根强い影響をあたえていたのは、何と云つてもあのミハイル・バクーニンであつて、風雲兒バクーニンは一八六八年から風光明媚の古都ナポリとフロレンスの間を往復し、その影響をうけた人々のなかには、さきにのべたカフィエロやアンドレア・コスタなどがいた。一八七三年マルクスと不和におちいりついに第一インターナショナルが決裂して以來、イタリヤはバクーニンの無政府主義の勢力のもとにあつた。バクーニンがイタリヤの社會主義運動において果した役割は、革命的な運動に人々を目ざめさせた點であつて、プロレタリヤ階級に彼等の敵が何者であるかを教えたのであつた。しかし當時の指導者であつたインテリゲンチャは、空想的な無政府主義にあきたらず、理論的なマルクス主義に傾いていつたことはやむを得なかつた。すなわちアキレ・

ロリヤのごときはすでに共產黨宣言を紹介したのであつて、無政府主義とマルクス主義そして更にフランス人、ベノイ・マロンの改良主義というこの三つが混在しており、こうした思想的な混亂を背後に、一八八二年最大の工業都市ミラノにおいて、イタリヤ勞働黨が生れたのである。その指導者はギュセッペ・グロースであつて、マルクス主義の影響がいくらかは認められたが、勞働者の運動そのものは急進的なものではなく、從つて組織的な力に缺けていたために、一八八二年及び八六年の總選擧においても全く議席がえられなかつたほどであつた。要するに一八九二年のイタリヤ社會黨の建設までの間は、大學教授や一部のインテリゲンチャが大衆の中に入らずに、これと遊離して上から思想的な宣傳をやつていた時代で、ローマ大學哲學科教授アントニオ・ラブリオラやその門弟ベネデト・グロース、更に後に社會黨の指導者となつたフィリッポ・トゥラティなどはその代表的な人々であつた。

こうしているうちにヨーロッパにおける社會主義運動には、マルクス主義勢力の勝利が壓倒的なものとなり、とくに一八九一年ベルギーの首都ブラッセルで開かれた國際社會主義會議では、マルクス主義者と無政府主義者とが分裂し、その影響がイタリヤにも及んで、ついに一八九二年ジェノアの大會では、無政府主義を排斥したマルクス主義者を中心として、イタリヤ社會黨が生れたのであつた。

三

一八九二年から一九一四年までの約二十年は、イタリヤ社會黨にとつては大きな飛躍の時期であつた。今迄は一部の知識階級や先覺者たちが、社會主義の福音を說いていたのであつたが、一八九〇年代になると、勞働者階級も次第に階級意識に目ざめはじめ、各地に勞働組合が結成されつつあつた。しかし勞働者階級の勢力が增大し、社會黨の組織が强くなればなるほど、支配階級の壓力が加わるのは當然であつた。そしてこういう下からもり上る力と、上からおさえつけようとする强い壓力とが衝突して一大事件となつたのが、シシリー島の農民の反亂であつた。しかしさきにのべたように、資本主義的に立ちおくれたイタリヤでは、農民たちは、まだプロレタリヤートとしての階級的な自覺は、きわめて低い段階にあつたので、近代的な勞働組合というものは存在しなかつたけれども、シシリー島には、すでに一八六〇年ころから Fasci dei Lavoratori という農民の組合ができていた。一八九三年シシリー島の農民たちは、貴族的な大土地所有制度と、そして支配者フランシスコ・クリスピの壓制に反對して組織的に大規模な反亂をおこし社會黨はもちろん、マジニーの流れを汲む共和主義者さえもこの運動を支持したのであつて、この運動が純粹に社會主義的なものでなかつたことはあきらかである。だが國內におけるこのような彈壓の强化は、その當時のイタリヤ資本主義の矛盾ときりはなして考えることはできない。すなわちフランスとの市場獲得の競爭と一八九六年のアビシニア侵略こそ國內における彈壓とほとんど時を同じくして行われたもので、それは早くもイタリヤ資本主義が、帝國主義的な段階に到達したことを示す「前ぶれ」にすぎなかつた。想えばこのクリスピのはげしい彈壓のなかに、すでにファシズムの素朴な姿を見ることができたであろう。

こうした情勢を前にして、社會黨がとつた手段は、ブルジョア急進主義者や共和主義者と共同戰線をつくつたことであつて、社會黨がこれらのブルジョア政黨と共同戰線を結成したことは、勞働者階級に對する裏切りであると非難されたが、クリスピのはげしい彈壓の前にはやむを得なかつた。これらの共同戰線派は、「極左派（エクストリーム・レフト）」と呼ばれ、一八九七年の總選擧には、社會黨の二〇の議席をふくめて六七名の議員をおくり出したのである。やがてクリスピはアビシニア侵略に失敗して失脚し、そのあとをアントニオ・ルディニが內閣を組織したが、彼はクリスピにもおとらぬ壓制者で、勞働組合に對して彈壓を强化し、ストライキを禁止して共同戰線に楔をうちこもうとした。ときあたかも一八九九年、イタリヤ全土にわたつて不安の空氣がみなぎり、米西戰爭の結果、原棉の輸入がとだえ、穀物は不足し、そのため勞働者の生活はひどくなつて、ストライキはしきりにおこり、ついに最大の工業都市ミラノには暴動がおこつた。そして二人の警官と八十人の民衆が殺され、四五〇名が負傷したほどの大事件をさかいとして、イタリヤ勞働者階級の力は支配階級にとつてはもはや手におえないものとなつた。そしてこの暴動が、社會黨の本部のあるミラノにおこつたことは興味深い。このようにして社會黨は發展をつづけ、一九〇〇年の總選擧には社會黨議員は二〇名から三二名に增大し、指導者ビッソラティとトゥラティの努力により、統一戰線を維持することができたのだ。しかしこのときジオリティ內閣の成立、從つてジオリティという老獪な政治家の出現はながくイタリヤ社會黨の運命を左右することとなつたことは注目されなければならない。當時、勞働運動はサンディカリズムの影響をうけはじめ、ともすれば思想をともなわない行動主義におちいりがちであつた。そのために黨內にはようやく分裂の機運があらわれはじめ、二十世紀初頭の十年間は、社會黨の組織は、一見はなはだ强くなつたように見えながら、その實、內部には大きな動搖と不安とがきざしていた、そしてこれがまたジオリティの乘ずるところとなつたことは云うまでもない。まことに、アントニオ・ラブリオラを指導者とするサンディカリスト、ビッソラティやボノミを中心とする改良主義的な右派、そしてトゥラティなどの中間派がともに存在して、イタリヤ社會黨の性格を特徵づけていた。そのために社會黨の下部組織である勞働總同盟は、マルクス主義よりも日和見的な改良主義からより多く影響をうけた。そしてこういう改良主義が支配的なうちに、イタリヤは第一次大戰に突入した。

四

戰爭中における社會黨の態度は、大體において日和見的であつたと云えよう。トゥラティやトレーヴ、そしてムッソリーニなどは中立主義、戰爭不介入主義をとつたのであつて、このころからムッソリーニが頭をもたげてきた。彼はサンディカリズムの影響をうけ、みずから社會主義者と稱して、ミラノで日刊新聞を發行し次第にその勢力をつくりつつあつた。彼は最初は戰爭不介入、中立主義の立場をとりながら、社會黨が次第に戰爭協力の色をこくしてゆくや、にわかにその態度をかえ、自分の支持者たちを集めて「戰鬪隊」(Fasci di Combattimento) を組織し、他日の蜂起にそなえてぬかりはなかつた。一九一七年三月、社會黨はトゥラティの指導のもとに、戰後に行わるべき計畫を發表し、共和國憲法、一院制、高級官吏の公選、公共事業など、民主的な共和國の建設をほのめかしたとき、ロシヤ革命のニュースは人々をおどろかした。そして社會黨内部の動搖、右派トゥラティとトレーブス、左派ラザリー及びボンバッキ、この兩者の對立によつてその分裂はさけがたいものとなつた。それはまた改革派と革命派、愛國主義者と敗北主義者との對立でもあつた。

こうしている間に、戰爭は終末に近づいたが、イタリヤは大戰の結果、戰勝國であつたにもかかわらず、ウィルソンの十四ヵ條によるロンドン條約の排除のために、領土分割の仲間入りを許されず、新しい貿易協定すらも結ばれなかつたために、イタリヤの民衆は、大きな不滿と幻滅にかられた。こうして戰爭後、イタリヤをおそつた反動的な機運をうまく利用し、戰後土地を與えられることを期待しつつ、しかも裏切られた小作人たちをうまくひきつけながら、社會黨に對抗してここに庶民黨が生れたのであつた。そしてこの背後にあつてこれを援助したものこそローマ法王であつた。ボルシェヴィキ革命とこれにつづくドイツの敗戰、ドイツ及びオーストリヤ皇帝の退位、ハンガリー革命、バヴァリヤの政變、ベルリンでのスパルタクス團の活動などの、國外の革命的な動きはイタリヤにも波及し、次第にたかまつてゆくインフレーションと生活難とは、民衆の不滿をかり立て、勞働者階級を革命的なものにしたのであつて、イタリヤ資本主義は大きな危機に直面した。一九一八年、リラは一ドルに對して六・三四リラであつたが、一九一九年には八・〇五リラとなり、更に一三・〇七リラとなり、ついに一九二〇年のはじめには、一八・四七リラと下落したのであつて、それがために生活費はわずか十八ヵ月の間に三〇〇%も騰貴し、復員軍人の失業や青少年の不滿によつて、社會不安はひろがつていつた。すなわち戰爭による青年のひどい幻滅と頽廢主義、そしてまた空虛な英雄主義は、ダヌンツィオなどの詩人的な文學と結びついて多くの青年たちに影響をあたえたのである。そしてこうした風潮こそファシストたちにとつては、またとない好機であつた。「未來は青年のもの」などと宣傳して、青年たちの革命的な思想と國家主義や偏狹な愛國主義にすりかえたムッソリーニのやり口は巧妙であつた。

だがこうした沈滯した空氣のなかにも、革命的な機運が次第におこつてきた。一九一九年七月、勞働者階級は政府のソヴェート・ロシヤに對する干渉を不滿として國際的なゼネストに參加し、また益々高くなる物價に生活の脅威を感じたロマニヤやトスカニの勞働者たちは、食糧倉庫から食物を沒收して、ここに食物配給のための地區ソヴェートを建設した。しかもこれを鎭壓するために派遣された軍隊までが同調して一緒になつてしまつたことは政府をおどろかしたのである。このようにして下からの革命的な行動におされて、かねて日和見主義をきめこんでいたトゥラティの社會黨も、默つてはいられなくなつた。そして一九一九年十月、ボロニヤで開かれた社會黨大會ではつぎのような三つの動議が提出された。すなわち、㈠ジェノア綱領の變更を求めること、㈡イタリヤ社會黨は共產主義インターナショナルに加入し、その名をイタリヤ共產黨と改めること、㈢ロシヤ革命の成功はこれを認めるが、社會黨は國内における民主的改革を强調することであつた。㈠は左派の見解を代表し、㈢は右派の主張であつたことは勿論である。それならばイタリヤ社會黨は、實際にどの方向に進んだであろうか。一九一九年の總選擧において、すでに一七五萬票を獲得し、一五六名の議員をおくり出した社會黨は、みずから革命的な政權をつくろうと思えば、できないことではなかつたが、しかし彼等はそれをしなかつた。指導者の一人、グラツィアディは機關紙アヴァンティ（前進）のなかでつぎのように云つた。「われわれはボロニヤの大會で決められたコースを歩むべきではない。つまり喧傳と議會での批判によつて、内閣の危機と政府の倒壞をよびおこすべきである……」と。その間に皇帝はニッティのあと、再び巧妙なジオリティに組閣を命じ、對社會黨工作にのり出した、しかし、せまり來る生活の脅威のために、ついに一九二〇年九月、勞働者による工場の占領が行われた。その組織の力において最も强いといわれた金屬勞働者たちは、トリノの工場を占領し、その占據した大車輪工場を中心として、ピエモントやロンバルディなどの北部イタリヤにその運動をおしすすめていつたのであつて、その運動の指導者はイタリヤ共產黨の建設者であつたアントニオ・グラムスィとパーミロ・トリアッティであつた。「グラムスィは工場ソヴェート運動の先頭に立つた。一九一九年五月一日に、彼が創刊した『新秩序』はこの運動の機關紙であつたのだ。」[1] 彼等は奮鬪した。總同盟も同じ種類の運動を全國におしひろめること、その運動を革命に轉化することなどの指令を發して、これを援助したのだが、しかし社會黨はすでにジオリティの甘言にのせられて、トリノの勞働者たちの革命的な蜂起にはあまり好意をよせなかつた。ジオリティは社會黨の指導者、ボノミ卿を通じて、勞働者たちに資本家と妥協することをすすめ、しかもこれに成功したとき、ボノミはつぎのように云つた。「自由が叛亂を亡ぼしたのだ。そして完全な自

由のなかに、反逆者たちは自分の失敗を認めなければならなかつたのだ」と。こうして一九二〇年の革命的な蜂起は社會黨指導者の裏切りとジョリティの老獪な政策のために失敗した。一度は筋肉勞働者だけでなくホワイト・カラーをも含めたこの運動は、一九二〇年の革命的な昂揚を最後として空しくついえ去つたのである。そして人々は、ボノミ卿が反逆者とののしつた共産主義者が、すごすごと立ち去つたそのあとから、恐るべきファシストたちが好機至れりと、ほくそ笑んでいたのを知らなかつたのであろうか。

ジョリティはファシストの毒をもつて社會黨の毒を制しうるものと考えた。一九二一年の總選擧においては、ムッソリーニの黑シャツ隊は、公然と社會黨員に暴行を加え、ファシズムはようやくその本性を暴露しはじめた。社會黨は、ここで二一名の議員を失つたのに反し、ファシスト黨は三三名に增加したけれども社會黨はまだ第一黨であつた。もし社會黨がこのとき、あの一八九六年の經驗に學んで、たとえば庶民黨と共同戰線を結んだならば、ファシズムの脅威は或は未然に防ぎえたかもしれない。しかし社會黨はこの機會を利用しなかつた。それどころか、黑シャツ隊の暴力におびえた彼等は、こともあろうにムッソリーニと「和解の約束」を結んだのであつた。もはや勝敗はきまつた。「社會黨はじつと立つて自分自身の孤立をほめたたえ、そして、成功が、すぐそばにいる人々を吸收するか、中立することかにかかつているという革命的な時期に、『世界に反對して孤立せよ』という合言葉の不合理に氣がつかなかつたのだ」と、現在の社會黨の指導者ネンニは回想しているが、もはやトゥラティの努力も總同盟のゼネ・ストも效を奏しなかつた。そして一九二九年には、ムッソリーニはみずから皇帝の信任を得たと稱し、ファクタ内閣を暴力的に打倒し、庶民黨の支持を得て内閣を組織した。一九二二年頃になると、ファシストの暴力は民衆の恐怖の的となり、言論と思想の自由はおびやかされるに至つた。そしてついに庶民黨のドン・シュトルッが、ムッソリーニに協力しないことを宣言するや、彼は最後の暴力的行爲に訴えて、「議員三分の二法」という無類の惡法を通過成立させたのである。これは總選擧において、ある黨派が最高の票を得た場合には、無條件でその黨派は三分の二の議席を獲得するという、まことにおそるべき法律であつた。かくしてムッソリーニは、あらゆるぎまんと暴力とを驅使した結果、一九二四年、ファシスト黨はついに第一黨にのし上り、これに抵抗した社會黨の代議士ピックシニは虐殺され、敢然起つて黑シャツ黨の暴力を非難し、ムッソリーニの責任を追及したマテオッティは暗殺されたほどであつた。

ここにおいて一九二四年六月、トゥラティ等は、マテオッティの追悼會をアバンチノの丘でもよおし、同志を糾合して、ムッソリーニを最高裁判所に告發すべきことを決議したが、權力がムッソリーニの掌中にある以上、失敗は火を見るよりも明らかであつた。かくして一九二五年一月三日をもつて、イタリヤ

にはデモクラシーはその影をひそめ、ファシズムが公然と暴力を振うにいたつた。ムッソリーニは勝ち誇つたようにつぎのように云つた。「憲法第四十七條には、衆議院は大臣を最高裁判所に告訴する權利を有するとうたわれているが、私はおごそかに問う。この議院の内外において、誰がこの第四十七條を自分自身に適用することをのぞむ者があろうか」と。そして彼は更に露骨にも、つぎのように告白してはばからなかつたのだ。すなわち、「私はこの議會及び全イタリヤ國民の前に宣言する。私そして私のみが、今までおこつたすべてのことに對し、その政治的道德的そして歷史的な責任をひきうける……もしあらゆる暴力が、ある歷史的政治的そして道德的な風潮の結果であつたとすれば、それはまさしく、われわれが戰爭に介入した當時から今日まで、私がおこなつてきた宣傳をもつて、そういう風潮を實はつくり出してきたからなのだ」と。ファシズムは假面をぬぎすてて、惡魔の本性をあらわした。スフォルツァ、グラムスィそしてゴベッティやロッセリなどの良心的な人々は殺され、その他の指導者たちは或は地下にもぐり、或はロンドンに亡命したのである。

（1）　イタリヤ共産黨小史國民文庫、三二頁

五

數年前、わが國でも上映されたイタリヤ映畫、「無防備都市」を觀た人々は、ヒットラーとムッソリーニのファシズムがどんなに殘虐なものであり、しかもこれに對するイタリヤ民衆の抵抗が、どんなに根强かつたかに心打たれたことであろう。ムッソリーニが權力を奪取したのちに、イタリヤ社會黨は、その指導者の多くが海外に亡命したために、重大な危機に直面し、次第に弱體化していつた。トゥラティをはじめ、ニッティやネンニなどは、パリーにおいて反ファシスト運動に從事し、新聞を發行するなどの宣傳につとめたが、その效果はうすく、しかも地下運動とはほとんど關係がなかつた。われわれはここで、一九二五年から一九四三年のファシズムからの解放までの間、地下運動によつて、頑强な鬪爭をつづけたイタリヤ共産黨の努力をあげなくてはならない。彼等は社會黨の指導者の多くの者のように、亡命せずに國内にふみとどまり、身命を賭してたたかつたのである。云うまでもなく、はげしい彈壓と拷問のために耐えきれず、轉向したり裏切つたり、もしくは右翼的な日和見主義に走つた者も少くなかつたけれども、多くの良心的な指導者たちは、反ファッショ統一戰線を叫びながら、その信條に生きたのであつた。一九三〇年代の世界大恐慌を契機として、ファッショ勢力が氣狂いじみたほど殘虐となり、ヒットラーの統總就任や一九三五年のイタリヤのアビシニヤ侵略などによつて、いよいよファシストが第二次大戰への準備をはじめたとき、强力に戰爭反對を叫び、社會黨との統一戰線をよびかけたものこそ、トリアッティを中心とするイタリヤ共産黨であつた。そしてこの努力は效を奏し、一九三四年八月、パリでイタ

リヤ共産黨と社會黨とはしつかりと手を握つたのである。

一九二一年イタリヤ共産黨が建設されてから、約十五年にしてようやく反ファッショ統一戦線は成つたわけである。しかもこれより先、フランス共産黨と社會黨との間にも、統一行動に關する協定が結ばれ、いわゆる人民戦線政府が組織されるに至つた。やがて一九三六年のスペイン動亂は、ファシストが勝利をしめたために、人民戦線は失敗したのだが、とにかくこの時期になしとげたイタリヤ共産黨の事業は偉大であつた。統一戦線こそファシズムを倒し、民衆の心をつかむことを共産黨も社會黨を學んだことは、それからのイタリヤ社會主義運動の上に影響をあたえた。一九四三年、ムッソリーニが倒れたあと、共産黨もバドリオ政府に參加したことは、この教訓にもとづいていたのであつた。現在のイタリヤ社會黨と共産黨との統一戦線が、たんなる理論の上だけでなく、苦しい實踐とにがい經驗を通じてきずき上げられたものであつたことを、讀者は知ることができたであろう。

※　※　※　※

わたくしは以上ヒルトン＝ヤングの著書を通じて、イタリヤにおける社會主義運動の歴史のなかに、ファシズムのほんとうの姿をとらえようとこころみた。ファシズムはどんなにおそるべきものであるか、それは、いかなる思想も宗教をも否定する暴力的なニヒリズムであり、文明の敵である。そしてわれわれが最も眞剣に考えなければならぬことは、ファシズムが、一九三〇年代の問題であるばかりでなく、實に今日の重大な問題であることである。それゆえ、民主主義に忠實であろうとする者は何人も、ファシズムに反對しなければならない。

――一九五四・一一・二四――

〈追記〉　わたくしはこの書を讀んだとき、著者、ヒルトン・ヤングの人となりについて知ることができなかつた。ところが、最近、勞働黨首アトリーの自敍傳を讀んだとき、ヒルトン・ヤングは、後のケネット卿であり、第二次マクドナルド内閣の保健相をつとめた人であることがわかつた。(C. R. Attlee; As it happend, his autobiography, p. 7)

書評及び紹介

ワーレン・C・スコヴィル

『フランス經濟におけるユグノー教徒』

Warren C. Scoville "The Huguenots in the French Economy, 1650—1750" Quarterly Journal of Economics, August 1953, pp. 423—444.

一

ナント勅令の廢止によるユグノー教徒の亡命は、ルイ十四世の治世の末期におけるフランスの經濟的衰退の重要な原因と看做されて來た。しかし從來かかる主張に對して納得の行く説明が試みられていない。ユグノー教徒の亡命がフランス經濟に如何なる影響を及ぼしたかについては、依然として再吟味を必要とする段階にあるといわなければならないのである。

しかし以下において紹介されるスコヴィル氏の論文は、依然として再吟味を必要とする段階にあるといわれるこの問題に對して速答を與えようとしたものではない。同氏の論文は、フランス經濟のなかでユグノー教徒が占めていた地位について言及したもので、ユグノー教徒の亡命がフランス經濟に如何なる影響を及ぼしたかという終局の問題を解明するための手懸りを與えようとしているに過ぎない。スコヴィル氏のことでの直接の問題は、ユグノー教徒が經濟面で著しく活動的であつたという證據があるか、もし活動的であつたとすれば、この事實を如何にしたら最もよく説明することが出來るかの二點であろう。

二

ナント勅令によつてユグノー教徒は自由な經濟活動を保證され、フランスの各地において顯著な經濟進出を實現することが出來た。當時、「この國の商工業の三分の二は彼等の手中にあつた」と信じられていた程であつた。ユグノー教徒の盛んな經濟活動についてスコヴィル氏は次の事實を指摘している。

最初、その商業活動について。ボルドー港のユグノー教徒は葡萄酒貿易を獨占し、またアメリカ貿易において重要な活躍を示していた。ボルドー經濟においてユグノー教徒が果していた役割は重大であり、「もしこの商人のうち若干がいなくなれば、現狀から推し、貿易にとつても非常に不幸であろう。何故なら、大部分の貨幣を持ち、ボルドー港の貿易の壓倒的部分を引受けていたのは彼等であるから」といわれた程である。ラ・ロシェルもユグノー教徒の重大な經濟中心の一つであつた。ここを根據としてユグノー教徒は海運業を獨占し、また附近のロッシフォールに基地を持つフランス海軍に對し物資を供給していた。知事の報告は、ラ・ロシェルにおけるユグノー教徒の經濟的地位について、「この地方の貿易は新教徒の手中にあり、誰も現在においては大きな損害を蒙ることなくこれを彼等の手から奪うことが出來ない。何故なら舊教徒は貿易を遂行するだけ强力ではないから」と述べている。ナントのユグノー教徒は外國商社の代理人として活躍していた。メッツにおいて新教徒は卸賣業の獨占者であつた。またリヨンの新教徒は商業に從事し、巨大な財産を蓄積していた。

次に、その工業活動について。二人のユグノー教徒によつてカアンには織物工業が發達し、「この二人のユグノー教徒の勤勉も設備も持たない」舊教徒には到達することの出來ない程の